

ドクター メモ

時代を反映する病氣

うつ病のタイプについて



現在、心療内科や精神科

を受診する人の多くがうつ病です。20世紀に入り、うつ病になりやすい病前性格についての議論が盛んになりました。1970年代ごろまでの

典型は、メランコリー親和型性格といわれ、仕事熱心で几帳面、責任感が強いが融通性に欠けるというものでした。1990年代から2000年代にかけて、ディスチミア親和型といわれるタイプ(新型うつ病)が若い世代を中心に現れました。社会的役割が持てず虚無的、罪悪感も薄く職場への不適応を起こすが、趣味などは普通にできるので怠けではないかと誤解されます。さらに現代では、職場での長時間労働や上司からの叱責、安い給与など過酷な労働環境に対するストレス反応としてのうつ状態が増えてきました。もはやタイプ論では語れなくなっている

のかもしれませんが。

うつ症状自体は、タイプによる大きな違いはなく、気分が落ち込み憂鬱になり集中力や意欲が低下します。不安感や焦燥感が強くなり、食欲不振や睡眠障害も出現します。このような症状が見られたら、できるだけ早く精神科や心療内科で受診することをお勧めします。悪化すると死にたい気持ちが出現し、時に自死に至る場合もあります。話を聞いてもらうだけでも楽になりますし、現在では新しく良いお薬もたくさん出ています。

うつ病は、その時代を映す鏡のような病氣です。どのようなタイプでも、本人は同じように辛い状態であり、周囲の人の理解や支援が必要です。

吹田市医師会

角谷 すみたに

岳朗 たけお